

沼津市若山牧水記念館

第14號

1995.3.1.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11 Tel(0559)62-0424

創作社全国社友大会の記念写真

大正十二年四月一日から二日にかけて、牧水は沼津で初めて「創作社」の全国社友大会を開いている。東京出離から三年目の、桜が満開の季節であった。掲出の写真は第一日目の歌会前の記念撮影である。この大会の一部始終は雑誌「創作」の大正十二年五月号に、二十六頁余りの紙面を割いて写真入りで大々的に報じられており、いかに牧水がこの大会に気合いを入れていたかがよく解る。

牧水の書いた文章に「大会前期」というのがある。そこから断片的に抽いてみよう。一週間後に大会を控えてこの時すでに主宰の気分は、すっかり盛り上がり上がっていた様子だ。

「いよいよ迫って来た。準備もおほかた整った。今は気になるのはお天気ばかりだ。第一日は降るともよし、二日目はどうか晴れてく



れ」

「東京、横浜、それに加わる東北方面の人々の沼津駅着が、四月一日午前三時十八分、四、五十人の乗り込みだ。春暁まだ暗い。高張ならぬプラ提灯を振翳して出迎える事になり、その注文ももう済んだ」

「受付で会費と引換に幅二寸長さ一尺餘の白布に姓名を書入れたものを安全ピンと共に渡す。各自はそれを自分の左の襟につけてほしい」

牧水が心配していた天気の方は当日昼ころから晴れ上がったという。桜もちょうど見ごろになって、富士山も時々見えたらしい。

第一日目は四月一日朝九時前に始まった。会場は狩野川に面した臨川館の二階。初めに講演が行われ、昼食の後、掲出の記念写真を写してから待望の短歌会に入っている。「創作社全国社友大会記」を読むと、大悟法利雄さんが「歌会記」のあとに「宴会記」という実に珍しい記事を書いている。

「部屋五つ抜いた広い会場のはなやかな電灯の下に約八十の親しい顔がズラリと並んで居る。夜の宴会が始まろうといふのだ。

見渡したところどの顔も皆包みきれぬ歓喜に輝いて居る。誰の心もやはらかに潤って居るらしい。しばらくは一語も発する者もない。声なきあたたかい言葉が心臓から心霊に流れ通って居る。びったりと抱き合った心霊によって醸し出された雰囲気のあたたかさよ、なつかしさよ！俺は涙ぐましくなってきた」

大会二日目は朝全員に弁当が配られ、千本浜に集まって賑やかに地引網が催された。鯛や烏賊など捕れた魚は、その日臨川館から呼び寄せた板前の手で即席の料理になった。

夕方香貫山の麓の創作社まで戻った。そこから帰路につく一行と、さらに伊豆長岡の温泉に行く組に分け、みんな「いーやさか！」を三唱した。その後揃ってぞろぞろと沼津の街へ繰り出している。

カフェー「酔太桜」で飲むためである。かくしてまさに春風駘蕩、結社結束の大饗宴は成功のうちに幕を下ろした。

歌の結社の催しなど、どれ程熱っぽく書かれていようと、外部の者には本当は面白くもなんともないのだが、ひるがえって、当時の歌人の気質とか結社とかいうものの内情を知るには、得難い資料だと言いうこともできよう。

(上田 治史)

文政八年のうたびと達

大岡の井口家の文書の中に、江間の石井家に於ける歌の集いの記録がある。祭りに集まった由来とその折の歌を書き留めたもので、前書きによると

「文政八年十月二日江間の石井通駿の家に於て秋津彦美豆桜根大人の祭りす。」とあり、この祭りは当初須山の渡辺真文が言い出して、三島社祝部鳥井氏の家でおこなったが、後に江間の石井家に移って、更に祭りを管むうちに、豪雨で狩野川の水量が増え二日には川を渡りかねてそのまま祭りを終り、直会もおわった後、歌の題を出して歌を作ったと言う。

「人々物に寄り添ひなど臥すとはすれど臥す間だになくて明果てぬればかかる円居を只にやはとて又同じこともしつづ三日三夜をなむ遊びあえりける。されば自然詠み出でたる歌の数も数多つもりて、此々彼此にちかほへは試みに書き集めるに、更に人の眼にとどむべきふしも知らず、あやしきひがことのみぞ多かりける。」と書き、「このまま残すのは心より外なる恥じもこそと破り捨てようとしたが、この祭りのかたみとかく書き残すもの」とある。それをこんな形で公表するのは本位ではないが、当時の裕福な地主・豪商などの生活ぶりが伺えて短歌の歴史の一コマになるのではないかと思ひ以下に記す。

題 寄書懐旧

わけいらむ文の林のおくのみちむかしの人のあとをたづねて 通駿
 たまちはふ神よのみちのおくまでもふみみてるそ
 うれしかりける 管磨
 濱千鳥跡としめすはなにはへのなにはのこともいか
 てるへき 貞雄

ふみとめしわかぬ浦わのうらちとり後みることにむかしをそおもふ 當直

題 河落葉

もみち葉のなかるゝ水に定なきみねの梢のあらしをそしる 茂雄

大る川からくれなゐの一村はいかたにちれるもみちなりけり 真鶴

河風にもみちみたれてからにしきおるやたつたの岸の夕波 正雄

此頃はなみさへ立にいつみ川散もみちはのひましなけれは 定経

題 海邊雪

ふりうつむ雪に梢の折ふして松より高き岸の白波 いち

うちみれば磯への松のしらゆきに波もしつつきたくれのうみ 美つ

磯ちかくはるかとみれば白雪とひとつになりぬ蟹のと万舟 と万舟 苦舟 茂雄

題 山家雪

とふ人も嵐もたえてふりつゝく雪にしつつき山陰の庵 菅磨

よのうさもけふはきこえてのとけしな雪降うつむ山陰のいほ 義一

ふるゆきにおのかねくらやうもるらん軒はにきなく谷の村鳥 茂枝

題 寄虫恋

虫のあとになきてあかさぬよはもなし人の心に秋立しより 真文

よもすから君松虫のねにたてゝ鳴あかせともしる人のなき みつ

恣意的に書き抜いたが、他に題としては樵路霜・

遠山雪・閑落葉・湖水鳥・里炭竈・深夜叢・寄橋恋
 寄筆述懐・杣川筏・竹窓夜雨・夕海・暁山などが挙げられ各人が歌つてゐる。なお、(通駿)は江間村の石井家の当主・本名清次良、(いち)は通駿の母、(みつ)は通駿の妻と思われる。(茂雄)は熊坂の竹村茂雄で伊豆の国学の祖として門人は二百余人を数えた。伊勢に赴き本居宣長に国学を学び、また村田春海に歌文を学んだと聞く。(正雄)は茂雄の娘のぶの養子(茂枝)は茂雄の孫にあたり幼名を重太郎と言ひ、正雄の後を次いで竹村家の八代を継ぐ。(菅磨)は竹村三右工門で、茂雄の叔父であり父代わりであった竹村家五代目源五良の子で分家にあたる。

(稲磨)は三島の武井平蔵、(真鶴)は和田村の濱野忠兵衛、(定経)は土狩村の有賀權左工門、(貞雄)は長泉の費川五平。(義一)は口野の足高春島のことか。そして(真文)は須山の渡辺五良次、(當直)はこの記録の筆記者大岡上石田の井口俊助この年四七歳である。いずれも各地の地主・豪商・網元で、当時の短歌が裕福な階層のものであったことを感じさせる。

文政八年と言えは將軍家斉の治世。一八二五年。この年「異国船打拵令」が出る。前年イギリスの捕鯨船が常陸大津浜に上陸、薪水を求め、またイギリス船員が薩摩宝島にて野牛を強奪するといった事件が起きての策である。この年の前後の知られた事件を挙げると、一八二一年には伊能忠敬の大日本沿海輿地全図が完成。三年後の文政十一年にシーボルト事件発生。世に有名な天保の大凶作は十年後の一八三六年、その前兆のようにこの年あたりから各地に一揆が起こり世の中が騒然としはじめた頃のことである。(資料 井口家文書・田圃の拔菜より)

(須永秀生)

第五回「中学生短歌コンクール」入選作品(平成六年度)

特選 (十首・十人)

鳥が泣き空も海も青く澄む見た目だけなら平和なものだ
 長井崎中 杉山 千尋
 夏祭りわたがしを手に夜道を歩く浴衣がとても似合っているね
 長井崎中 大村 友美
 バットをペンにかえた重たさひしひし感じる受験戦争
 長井崎中 伊達由見子
 けんばんに触れし指先緊張す指揮する友をじっと見つめる
 静浦中 川口 陽子
 その瞬間胸がドキドキさわいでる自分の気持ち伝えたいって
 静浦中 増田佳奈子
 ゆかた着て水食べてる街角で大きく響いた最後の花火
 愛鷹中 大嶽 有理
 ひまわりが庭のかたすみいっぱい広がる笑顔夏の絵日記
 愛鷹中 鈴木 智恵
 威勢良く横を駆けてく小学生カタカタとなる靴の筆箱
 愛鷹中 瀬川 陽介
 瑠璃色のビンにしみずを注ぎ入れ午後の一時を楽しんでる。
 原 中 松野 佑香
 「家のチビ」っていわないでよねお父さん我家で一番ノッポの僕に
 第五中 遠藤 大志

入選 (四十一首・四十一人)

雨あがり葉っぱの上でコロコロと水晶玉がおどり舞う
 長井崎中 渡辺 大介
 気がつけばうすくなつてる日めくりが夏の短さ教えてくれる
 長井崎中 山田さつき
 あじさいの上をゆつくり歩いているぽつんと一匹かたつむりかな
 長井崎中 青木 真也
 墓参り花と水をあげてそふしのぶまだ二階からおりてきそうだ
 長井崎中 塩谷 康史
 感動のラスト二秒の一瞬に時が止まったスリーポイント
 長井崎中 斉藤 由記
 朝おきて外から歌声聞こえてくるよとりと川とのハ一モニーがさ
 長井崎中 米沢 郁乃
 夏の風ひまわりの葉をなびかせて水のしずくがぽつんとおちる
 静浦中 藤本 幸子
 秋風をあびてあがりし太刀魚の月光映えて魚たい美し
 静浦中 小早川 亮
 夜の海髪をなびかせ風がふく水平線にともしびひか
 静浦中 渡辺 清美
 あの夏の花火は今もおぼえてる楽しかったあの夏の日は
 静浦中 笹原加奈子
 ただいまと帰ってくる姉大人びてまたもう少し引きはなされた
 第二中 兼杉 奈保
 指先に血をにじませて車輪をまわすかごの子リスは弟のもの
 第二中 田代小也香
 夏の夜安曇野の空見上げればいくつもの星流れて消える
 第二中 中村 亮平
 夕立にいそぎ木かげに飛びこめば我より先に雨がえるいて
 第二中 露木 友紀
 暑い夏の光が地にささり道とおる人手で汗ぬぐう
 第二中 田中 晴一

社会党政治方針転換で正反対に話が変わる

スタートし二走にバトンわたすとき私の夢もわたつてゆくかな
 第二中 後藤 麻里
 すくすくと育つひまわり陽をあびてどこまで育つか
 第二中 青木 明美
 夏休み父の背負うは子ではなく自分の趣味のスキューバボンベ
 第二中 下山 真代
 目を閉じて草のささやききいてみるやさしくなれる不思議な音色
 愛鷹中 大嶽 望
 夏の夜火の神囀む子供らのほほをそめてる赤い炎
 愛鷹中 須貝 紋子
 夏休み母と一緒に岐阜へ行く主なき悲しい祖母の家
 愛鷹中 川口 範子
 食卓で父と顔会わず朝食が苦痛の時間我反抗期
 愛鷹中 豊田あゆみ
 見上げると道は雲にかくれたりまだ先長き頂上めざす
 愛鷹中 小島 克久
 さとうきび風に吹かれて葉々ゆらせ祖母のふるさと沖繩の夏
 愛鷹中 大嶽 夏代
 おとなりのピアノの音が響くたびあこがれふくらむピアノの先生
 愛鷹中 鈴木 祐佳
 夏休み学校の中物おとが一つもしないわすれものをとる
 愛鷹中 小野 洋嗣
 今日朝背を向け合った私たち昼休みには笑って話す
 愛鷹中 木全 春香
 洞窟の中にかすかな光あり奥へ広がる未知の空間
 原 中 稲田 浩太
 真夏の日冷たく光る床の間に猫のびのびと寝そべっている
 原 中 狩野 淳子

炎天下流れ出す汗手でぬぐいラケットをにぎり白い玉追う
 片浜中 間間 祥紘
 秋の夜虫鳴き声やんだ時にわか稲妻大つぶの雨
 片浜中 西家 徹
 夏のかぜ潮のにおいに包まれてせんたく物がまだかわかない
 片浜中 竹内華奈子

庭先に水を求めしはち一匹つくばいの水いくどとか
 よう
 第五中 米倉 隆司

川岸に立つわが耳をかすめゆく水の言葉や風の言葉
 に
 第五中 鈴木 圭

暑き日に祖父は静に逝きたもう枢にそつと芙蓉の花
 そう
 第五中 白石 花織

わるいことやつたわけではないけれどバツをならべ
 るクロスステッチ
 第五中 児玉 名奈

仰ぎ見る掛川城の白壁に銃座の窓が四方をにらむ
 金岡中 山田 恵子

時計見てまた時計見て時刻みて時におわれしこのせ
 わしさを
 金岡中 飯島 庸右

さわやかな初夏の風を身に受けてかわいく揺れるす
 ずらの花
 金岡中 西堀 友美

しつかりとラケット握りひとり打つ中体連のゆめや
 ぶれてもお
 第四中 川口 哲

選 後 評

コンクールには第一中、第二中、第四中、第五中、
 片浜中、金岡中、静浦中、愛鷹中、原中、長井崎中
 の十校から昨年を五十首ほど上回る六百九十五首の
 応募があり、牧水会理事の上田治史、青木朝子、川
 口和子、須永秀生の四名が審査を行なった。

文化講演 (牧水記念館会議室)

三月十一日 (土) 午後二時
 「山崎剣一と沼津」

岩 田 昴 (大正大学講師)

「波瀾の南十字星・山崎剣一の生涯」の著者

今年、異常気象による猛暑で、渇水、曇さ、炎
 熱の日々、または、それに付随するものを題材とし
 た作品がほとんどで、暑い中で行う部活動、勉強に
 ついて触れたものが全体の約六〇%を占めている。

特に、猛暑のイメージが強く、どれも同じような形
 になっってしまったが、特選には、自然環境に対
 する中学生らしい危機感、見解が述べられた杉山千
 尋さん(長井崎中二年)の作品をはじめ、現代語を

無理なく使って仕上げた大村友美さん(同三年)、特
 異な素材を用いて作品全体に倦怠感を漂わせる松野
 佑香さん(原中二年)の作品などが選ばれた。中

でも、審査員の間で好評を得たのは、鈴木智恵さん(愛
 鷹中二年)と遠藤大志君(第五中三年)の作品。

鈴木さんの作品については「何気ない風景を捉え
 ている。『夏の絵日記』という表現は技巧的にも大変
 素晴らしい」としており、遠藤くんの作品について

は、「単純で簡単な表現だが、誰が聞いてもいいなと
 思う。家族の愛情が表わされている」と評している。

(須永秀生)

牧水歌碑を探ねて

沼津近辺には車で一時間程で行けるゴルフコース
 は三十をくだらないと思う。その内の一つに長泉町
 にある富士エースゴルフ場がある。昨年春このコー
 スでプレイしている際偶然、牧水の歌碑を二つ発見
 した。アウトの六番とイン十二番である。他に西行
 法師、在原業平、源実朝といずれも桜花を歌った歌
 碑が見付かった。前の社長が建てたと言われるが、
 当時を知る人は殆ど居ず、とりあえず、歌だけ紹介
 にとどめておく。

(佐野利夫)



富士エースゴルフ場
 アウトの6番

咲き満てる桜のなかのひとひらの
 花の落つるをしみじみと見る(別離)
 とほ山の峰越の雲のかゞやくや
 峰のこなたの山ざくら花(山桜の歌)

富士エースゴルフ場
 インの12番

